

研究ノート

歴史民俗系博物館における階層構造に基づく資料整理試論

米谷 博

千葉県立中央博物館大利根分館

〒287-0816 千葉県香取市佐原ハ 4500

1 はじめに

一 歴史民俗系博物館の資料の成り立ち一

歴史民俗系の博物館や資料館が収蔵対象にしている資料は、古文書や書籍などの歴史資料や、錦絵や絵画などの美術資料、それに日常生活や生産に関する民具を中心とする民俗資料などが主流である。地域に生きた人々を取り上げる地域博物館では、特にその傾向が強いが、資料収集の経緯となるとコレクションの中心でありながら予算化して計画的に購入したのではなく、寄付の申し込みがあって偶然収蔵されたものが大半である。よくある典型的な例を次に示すと、ある旧家が家を建て直すために屋敷内の建物を全て取り壊すことになり、その家から博物館で必要なものがあれば寄贈してもよいという連絡が博物館に入ったとする。そういった際に学芸系職員は、まずその家や地域がどのような歴史環境にあったのかなどの基礎情報を集め、その後、現地へ下見に行くことになる。そしてその家の生業や由緒などの聞き取り調査をしながら母屋をはじめ納屋、土蔵、作業小屋などにある膨大な数の農具や生活用具などを一通り見せてもらい、さまざまな視点からそれらを観察して、そのなかから博物館の収集方針に沿った資料を選択してゆく。場合によっては建物ごと受け入れるということもあるかも知れない。しかし現実的にはすでに収蔵している同系統の資料の有無や、収蔵スペースの関係を考えながら受け入れるかどうかを検討することになり、ここで最初の関所とでもいべき資料の取捨選択がなさ

れる。

例えば、唐箕や万石通しなどの農具は比較的多くの家に残されているが、大きいものなので館蔵品のなかにすでに同様の資料があれば、年号や購入元の銘があるような特別な場合以外は、受け入れ対象から外すかどうかの議論がなされる。しかし大きな長持ちが一棹あって、そこに近世から近代にかけての古文書などの記録類が詰まっていたとすると、それは特別な事情でもない限り、大抵の博物館は長持ちごとそのままの状態を受け入れると思われる。

これは古文書ならば収蔵しても民具ほど嵩張らないといったスペース的な理由もあるが、それよりも、文書などの文献資料は保存されていた現状を記録し、資料の全体像を崩さずに保存すべきだという原秩序を維持する意識が、歴史資料論として普及していることが大きく影響している。この点については後述するが、資料受け入れの段階から民俗資料と歴史資料では、このように考え方に大きな違いがあるのが現状である。

さて次に、収蔵した資料の整理作業についてであるが、まず燻蒸などの処理をしたのち、それぞれの資料が持つ特性から民俗・歴史・美術などの資料に大きく分類してゆく。この大分類がそのまま収蔵庫内の保管場所にも反映することが多い。例えば、民俗資料として稲作関係の農具類を受け入れたとすると、収穫用具とか脱穀用具などというように資料の用途別に分類し、資料番号を付してからそれぞれの保管場所へ収

蔵することになる。つまり収穫用具であるA家の鎌は、すでに収蔵されているB家の鎌やC家の鎌と同じ資料群に追加され、それらと一緒に保管されるわけである。同様に膳碗などの食器類や野良着や笠などもA家というまとまりから外れて、同じ資料が集められている棚に保管されることになる。

それに対して古文書などの歴史資料はというと、発見時の状況を重視しながらA家文書という一つの資料群として整理し、資料の階層構造を考慮した目録を作成する。ここでいう階層構造とは、資料群が成立するのに基礎となった幾つかの層のことである。同じ家の文書でも名主役を務めていたために形成された文書群もあれば、ある組合に所属していた関係から成立した文書群もある。また、商店を営んでいたゆえの経営関係文書などもあるわけで、このような個々の資料群を作り上げている名主、組合、商業などの小項目をそれぞれの層とし、その編成内容を重視することで資料群全体の成り立ちを保持しようというのが階層構造を考慮した整理である。文書館をはじめとする多くのアーカイブズ機関ではこうした整理方法が主流になってきている。

整理された資料はA家文書として同じ棚に保管することになる。また長持ちから出てきた古写真や錦絵・墨蹟・絵画などの古文書以外の資料については、美術資料として分類することもあがあるが、同じ出所であるのでそのままA家文書として歴史資料に含めることが多い。同様に印鑑や古銭などが含まれていたときも同じ資料群の中の一資料として整理することが多い。

このように一軒の家から受け入れた資料群は、まず歴史資料と民俗資料とに大きく分けられたのち、その先の整理方法は同じ出所でありながらも大きく異なるのが実状だといえる。その結果、後任の学芸員がその資料群を概観しようとすると、歴史資料は家ごとに階層構造ごとの目録があるので比較的容易に全体像を掴みやすい

が、民俗資料は保管場所もバラバラであり、ましてその家の民具全てを受け入れたわけではないので、資料群全体をイメージすることは非常に難しくなる。つまり収蔵した資料が、その家のなかでどのくらいの分量を占め、どのような意味を持つ資料だったのかもわからなくなってしまいうわけである。

民俗資料と歴史資料のこうした違いは、資料群全体像の重視という点で考え方に大きな違いがあるからであり、それは後述するように博物館の展示での活用方法の違いにも現れている。古文書を対象とした歴史分野においては、これまで多くの議論が蓄積されており、階層構造を重視した整理というの、そうした議論の成果として編み出されたものだった。

そこで本稿ではこうした歴史分野の成果を、用途別分類が定着している民俗資料の整理に反映させることで、出所であるその家の多面的な諸相を重視した民俗資料の整理の可能性を考えてみたい。それにより歴史や民俗というそれぞれの学問分野に立脚した両者を区分する現在の博物館資料論ではなく、地域の生活文化を重視した新しい人文系資料論を、博物館から提唱することができるのではないかと考えている。

2 民俗資料の分類

民俗資料の調査・研究については、多種多様な民具を一定の基準のもとに分類することが重要であるとされ、すでに昭和初期には宮本常一や柳田国男によって分類項目も示されている。それ以降、材質・用途・形態などの視点からさまざまな分類案が提案され、分類することが資料の調査・整理をする前提と考えられてきた。そして昭和40年には文化庁編集による『民俗資料調査収集の手びき』（第一法規出版）が刊行され、そこでは民俗資料が用途を主題とした11項目（衣・食・住、生産・生業、交通・運輸・通信、交易、社会生活、信仰、民俗知識、民俗芸能・娯楽・遊戯等、人の一生、年中行事、

口頭伝承)に分類されており、それぞれ無形民俗資料と有形民俗資料の代表的な資料が数点ずつ列挙されている。そのなかの交易の有形民俗資料には、帳簿、判取帳、証文、手形などが入っており、また社会生活の村の共有用具として書類箱を含めているように、民俗資料の中に歴史資料を取り込んでいる点で注目できる。ここでいう書類箱とは容器だけを指しているのではなく共有されてきた文書も含めてのことであり、文書をめぐる民俗として共有文書の民俗的資料性を考慮しているわけである。文化庁としては文献資料の一部を含む範囲で民俗資料を考えていたことがわかる。

『民俗資料調査収集の手びき』の例言には主要な項目の分類について「調査収集にあたっては、各地の地域的特性に応じて項目は適宜加除することが適当であろう」と、あくまでもこの分類は目安であり絶対的な基準ではないとうたっているが、その後の昭和50年代以降に全国各地に設立されていった多くの博物館や資料館の民俗資料の収集・整理に、この分類は大きく影響していった。そして古文書などの歴史資料についても、各地でその頃から自治体史編さんが盛んになるのに伴って、主題別の分類に基づく資料整理が進められてゆき、文化庁が例示した共同体の共有文書や帳簿類などは、民俗資料とは区分され歴史資料の中核となっていくことになった。

こうして細かい項目に細分化された民俗資料は、その分類に基づいたデータベース化が進んだことで、資料の検索や他の資料との比較検討が非常に容易になった。しかし、民俗資料のもつ多面性から、同じ資料でも館によってその資料がどの項目に分類・登録されているのか、また資料名称が地方名か標準名なのかなど、記載基準が統一されていないという問題もあり、早く的確に資料を探すには、結局その館の担当者に関わらなければならないということも多々あるのが実状である。

こうした民俗資料の用途を主題とした分類は、形や名称などの違いを分布図などで明確に掴むことができたが、一点の資料として取り出してみると、そこから得られる情報はそれほど豊かというわけではない。まして旧蔵者からの聞き取り情報が乏しい資料は、考古資料で言えば出土状況の情報が少ない表採資料のようなものであり、骨董店に並んでいる民芸品と同様に参考的な資料になってしまう危険性もあった。

一軒の資料群を個々に分解する用途別分類のこうした弱点を克服するためには、歴史資料の整理に用いられるような出所を単位とした資料群全体の民俗調査が有効だと思われる。すなわち資料を受け入れる際の調査で、現地にどのような民具がどこに何点保管されていて、受け入れたのはそのなかのどのような資料なのかを記録保存することである。勿論その作業は所有者に関わらなければわからない情報もあり、また保管されていた場所も季節によっても異なるので非常に大変な調査となる。しかし同じ農家でも稲作から畑作へ変わったり、または養蚕や煙草が主になったりという生業の変遷があったときには、その家の民具相が大きく変わってしまうので、なおさら資料群を全体的に把握しておくことが重要となってくる。

一軒の家が所蔵する民具全体の把握という視点は、前述の文化庁編『民俗資料調査収集の手びき』には見られず、また平成16年度の日本博物館協会編『資料取り扱いの手引き』でも触れられていない。後者は考古・文書・民俗などの分野別にこの本のテーマとしている「博物館の望ましい姿」として収集・整理の方法が述べられているわけだが、民俗については用途別分類を前提とした資料論が主となっている。つまり民俗資料の中心をなす民具類については、40年の間、資料論の新しい議論はなかったということになるだろうか。

田辺悟は民具の細分化が進んだことで民具研究へ学問的な視点が注がれるようになった反面、

研究が人間不在、生活不問という方向へ向かって行くことの危険性を指摘し、分類内容の統合化を提唱している（『民具研究ハンドブック』雄山閣 昭和 60 年）。この指摘も民具全体の把握を目的とした統合という意味ではなく、人間の暮らしを考慮して用途別、形態別などという分類を、もっと多様な視点から分類すべきという意味での統合化の提唱であった。

そのような中で佐々木長生は「民具保有状況の把握」という視点を提示している。それは一地域や一軒という単位で保有する民具の悉皆調査をすることで、個々の民具がその家の中でどのような意味を持っていたのかを捉えるべきであるというもので、とくに民具調査の際はすでになくなってしまった民具まで聞き取ることにより、数量的にも把握すべきだとしている（『民具調査ハンドブック』雄山閣 昭和 60 年）。

その後、電気製品や機械類なども民俗資料に含めるなど、資料概念の広がりとともに多様な分類も行われるようになったが、用途別という視点は民俗資料の整理をするうえで基本的な考え方として用いられ続けている。

3 資料の階層構造からの編成内容

旧所蔵者が保有していた歴史民俗資料の全体像を把握できたとして、次に地域の特性を考慮した資料の階層構造を具体的に考えてみよう。例とするのは千葉県立中央博物館大利根分館の収蔵資料である。

大利根分館は利根川下流域の水郷地帯に位置しており、そのため館周辺では昭和 30 年代まで小さな農船を日常の交通手段に用いていた。どの農家も稲作を中心とし、農間には淡水漁業をするような暮らしが一般的であった。そのある家で使われた民俗資料を出所毎に資料群として捉えその編成構造を考えると、まず生業、農間業、生活用具、さらに信仰や娯楽のような大項目に分けられる。生業については稲作中心の農業であり副業であった漁労、狩猟、渡船運

営などが小項目として考えられる。

家の諸相を示すこうした小項目を資料群の階層とし、それに即して民俗資料を見てゆくと作業ごとの資料群全体を把握することができる。水郷地帯であるので稲作関係の用具としては低湿地で使われた水車みずぐるまや田下駄などの地域的な特徴が現れてくることになる。さらにこうした農作業関係資料に歴史資料を併せる事で、その資料群はその家の全体像を反映することになる。この資料群とは農作業に伴う儀礼的な行事である無形の資料や歴史資料として分けて整理してきた農事日記などの記録資料も含んでのことである。

例えば渡船経営に関する歴史資料としては、請負定書や運賃取り決め書、運行日誌などがあるが、民俗資料としても渡船営業の鑑札などの小さなものから発着所の看板やランプなどがあり、さらに舟そのものや待合所の建物などの大きなものが資料として残っている場合がある。それらの資料を歴史と民俗というような線を引かないで、その家の一段面として考え、渡船という項目の中に歴史資料も民俗資料も含めてゆくことが、その家の渡船経営全体を把握するには有益であることは間違いない。それを最初から文献か民具かというように区別して調査に臨んでは、全体像を最初から見落としてしまうことになる。

つまり文献資料も同じ出所の資料群として考えるわけである。それにより文献だけではその家の農業経営として年貢や収穫高、土地の売買などの情報しか得られなかったのが、民俗資料と併せる事でどのような農業が行われていたのか具体像を知ることができる。また逆に、民俗資料からはつかみにくい社会背景などの情報を歴史資料から得ることもできる。すなわち歴史資料の目録編成として家毎に立てる名主役とか渡船請負、それに河岸問屋などという項目を、そのまま民俗資料の編成項目にも当てはめることで、より全体的な資料の把握が可能となるわ

けである。もちろん資料や形態から館内での収蔵場所は別々になるであろうが、共通記号を付すなどして同じ編成として考えるという意味である。

実際に民俗資料の調査をすすめる過程で文献資料が見出されることはよくあることで、それらは聞き取り内容の年代的な裏付けができる根拠として重要な資料となる。しかし当初から文献資料の調査を目的として入った場合、関係する民俗資料が残っていても見過ごされてしまうことが多い。これは調査者の意識に大きく左右されるが、こうした歴史や民俗という線引きは旧所有者側からすれば意に介さないことであり、調査者側が勝手に自分をどちらかの立場においているだけであるので、それに拘ってしまうと家全体を一つの資料群として捉えることができず、重要な資料を見落とすことにもなりかねない。

4 歴史資料と民俗資料の違い

— 文書館と博物館の資料論 —

人文系資料を整理するのは、保存および活用するためであるという点は、歴史資料も民俗資料も同じである。しかし同じ出所の資料でも歴史や民俗に区別して扱ってきたのは、蓄積されてきた学問的な研究方法の違いにその要因があるからといえる。

歴史資料の保存・活用に特化した施設として文書館がある。資料展示の機能を持たせている館もあるが、収蔵資料の主な活用方法としては展示よりも利用者の閲覧である。ただし、博物館と比べて活用をそれほど積極的に宣伝しているわけではなく、広報しているのはむしろ記録資料に対する保存意識の啓蒙である。つまり文書館の活動の主体は資料を保存することに重点があるといってよい。その点、博物館での資料の活用とは主に展示であり、保存や活用と同等の比重をかけているといえよう。その点から博物館と文書館の展示について考えてみたい。

地域にとって重大な歴史の事項を紹介する展示をするとすると、文献資料を活用した歴史学の研究成果に基づいて、社会的な背景と関連させてその事項の歴史的な意義等を紹介することが重要となる。また地域の生活文化を紹介する展示では、民俗資料を並べてその形態や製作方法、さらには使用方法とその道具を用いた作業などが中心となる。そうした際に博物館の展示では資料であるモノを見せたいのか、モノを通じて作業やそれにつながる産業や流通、文化などの社会を見せたいのかによって展示している資料の意味が変わってくる。たとえば農作業の用具である鎌を展示した場合、鎌の製造方法や形の変遷、柄の特徴などといった道具そのものを紹介する展示なのか、それともこの地域の農作業を紹介するうえで、使用農具の一つである鎌を紹介するのかということである。つまり前者の立場からの展示であればA家の農業用資料群というまともにはそれほど問題ではなく、各地のさまざまな形の鎌を紹介するうえでの一つの資料であればよく、地方や時代などがわかれば展示の中での一資料としての役割は担うことができる。そうした場合、鎌の数は多ければ多いほど比較分析のデータを得ることができる。後者の展示であれば、ある地方において上層の家にはどのような鎌が何本位あって、それらをどこからいくらで入手したのかというような、A家の農作業全体を紹介するなかでこの一資料が意味を持つてくることになる。場合によっては他の農具よりも点数が少ないことを示すことで、鎌を使う作業が少ないA家の生業面での特徴を紹介することも可能になる。こうした場合には出所単位に資料を展示することが重要となってくるわけである。

ある家の農業をテーマにした展示をした場合、古文書を主とした構成ならば史料の背景となる文書群全体の中での把握が不可欠であり、その家の生産活動全体の中で農業が占めていた割合などの位置づけが重要となる。それに対して民

俗資料を中心とした展示では、資料の背景にある家のことよりも、資料そのものから導かれる使用法や製作面での特徴や地域性を重視してきた。そこに歴史と民俗という両者の立場の違いから資料への関心面の相違が現われているといえよう。

5 まとめにかえて

博物館における歴史・民俗に関する調査研究は、学芸員が学会や大学の研究室で学んできた歴史学や民俗学という学問分野の成果に大きな影響を受けてきた。そのもっとも顕著なのが、本稿でとりあげた同じ家の資料でも歴史と民俗というように分けて資料整理をすることである。しかし展示室の中ではどちらの資料も混在させて紹介することが多く、一般見学者の歴史感覚からすれば歴史も民俗も混在しているのが当然なことなのである。まして絵馬や石造物、それに年号が記された民具などのように、時間と地域が特定できる資料は、歴史か民俗かといった二極的な分類に適さない資料も博物館にはたくさん存在する。

こうしたさまざまな資料と対峙する博物館では、学会や大学の研究室で築かれてきた研究方法とは異なる地域文化の研究方法及び資料論を考えてゆく必要がある。それは博物館独自の地域資料学ともいうべき、地域の生活全般にわたる歴史・民俗資料論である。そして、その中心となるのは資料の出所を単位とした資料群という考え方であり、そのためにも現在歴史学で議論されている資料整理論を人文系資料全体に当てはめて検討することが有効ではないだろうか。

付記

本稿は国文学研究資料館主催の平成 19 年度アーカイブズカレッジに修了論文として提出した「歴史民俗系博物館における階層構造に基づく資料整理」を基に再構成したものである。掲

載にあたり当館上席研究員島立理子氏より多くの助言をいただいた。記して感謝の意を表します。